

日本ロレンス協会 第54回大会報告

今年度は開催校として3年前から鳥飼真人先生が準備を進めてくださっていた高知県立大学で開催となりました。開会にあたり三浦要一文化学部長よりご挨拶をいただきました。美しい永国寺キャンパスに全国から会員が集まり、心から待ちわびていた高知での第54回大会がスタートしました。



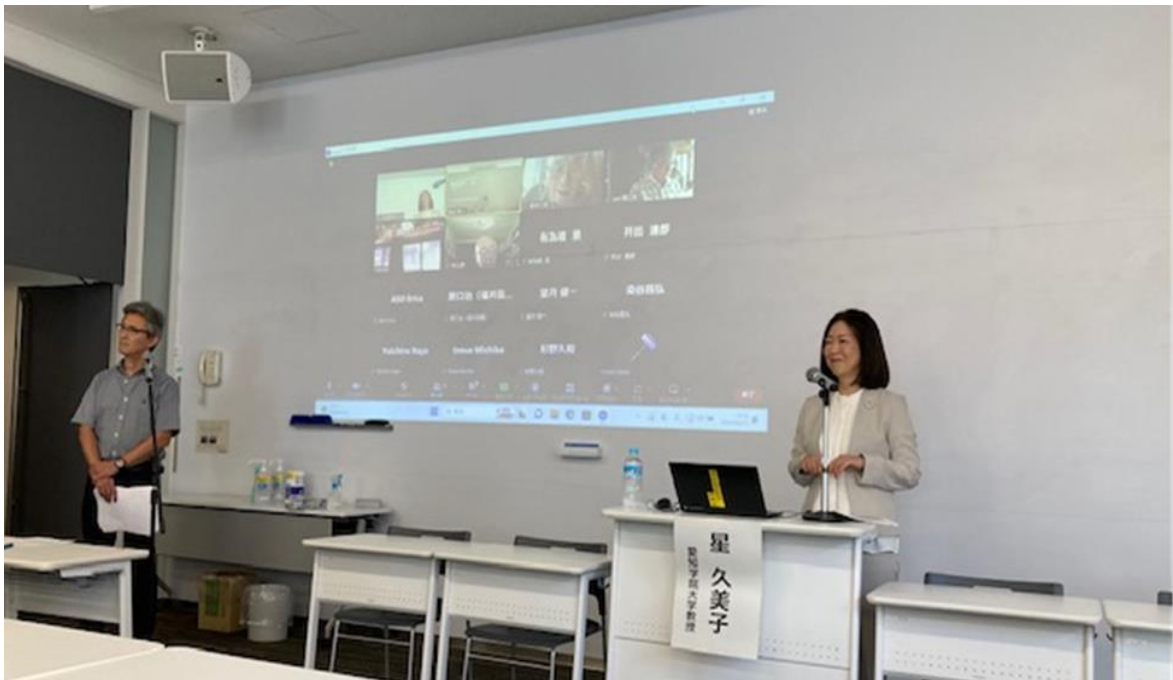
記念モニュメント「詩の翼 (うたのつばさ)」(新宮晋) <https://www.u-kochi.ac.jp/site/research/20211019.html>

研究発表

二つの研究発表がありました。①新井英永教授の司会のもと東京大学大学院生の古城輝樹氏が発表されました。*Sons and Lovers* を Posthuman Bildungsroman として読むことで、Paul の「成長」の意味を読み解き、本作品の新たな読みの可能性を大きく広げる発表でした。



②次は星久美子教授（愛知学院大学）のご発表「ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を「バイオフィクション」として読む」です。司会は中林正身教授でした。星先生の仮説と慧眼に一気に会場が引き込まれ、「バイオフィクション」をどう読むべきかという問題に質疑応答も盛り上がりました。



シンポジウム

1900-30年代のモダニズム雑誌と越境者たち

本年は、多くの会員の皆さんに関心を寄せていただけることを期して、「雑誌メディアとロレンス」をテーマとして掲げ、その導入的シンポジウムの開催となりました。司会の福西由実子氏はじめ3名の講師が登壇しました。ロレンス研究をはじめとする昨今の英文学の射程の広さと豊かさ、研究への尽きることのない先生方の熱意や誠実が結実した画期的なシンポジウムでした。



- ① 「*The New Age* を再考する—植民地出身のジャーナリスト Beatrice Hastings を中心に」
講師 加藤彩雪（大妻女子大学専任講師）



- ② 「分散するテキスト、切断される詩人の身体—と 1920 年代の Emmy Veronica Sanders と expatriate little magazines」 講師 大山美代（近畿大学特任講師）



③「越境するユダヤ人ジャーナリストたち—1920-1930年代における Stefan Lorant, Laszlo Moholy-Nagy の活動を例に」講師 福西由実子（中央大学教授）



充実したシンポジウムとなり、活発な質疑応答が交わされました。引き続き、総会と交流会が開催され4年ぶりに対面での話し合いが実現しました。今後の学会の在り方についてなどの意見交換に加え、近況報告も含め久しぶりの会員同士の交流の充実した時間となりました。



以上、総合司会の鳥飼真人先生、石原浩澄会長、木下誠副会長を中心に数年がかりで計画を進めてきた悲願の高知での本大会は成功裏に幕を閉じました。皆さま、本当にありがとうございました。

来年度の第 55 回大会は 2024 年 6 月に甲南大学で開催予定です。